

# 誰がクラシックコンサートに行くのか

—東京・新潟・鹿児島コンサート会場におけるアンケート調査をもとに—

比較教育社会学コース 西 島 央

Who Attends Classical Music Concerts?

—Based on Questionnaire Research Conducted at Concert Halls in Tokyo, Niigata, Kagoshima—

Hiroshi NISHIJIMA

In Japan, what sort of people attend classical music concerts?

It has been said that the classical music is an orthodox current of culture from the West, which was set up alongside the establishment of the modern educational system in Japan. Recently, however, the number of classes of music and other arts related subjects has been reduced as a result of the new national curriculum. In addition, the development of the Internet has provided a dramatic increase in terms of alternative access points to music. These are resulting in a dramatic change of music culture. Under these conditions, is it probable to think that attitudes towards classical music concerts might be in a process of change?

The purpose of this paper is to illustrate the current conditions in relation to classical music concerts attendance from a sociological perspective. Methodologically, the paper draws upon evidence garnered from a questionnaire survey conducted at classical music concerts in Tokyo, Niigata and Kagoshima, between April and August 2002.

To date, there have been few studies to investigate the sociological profile and associated behaviour related to classical music concert attendees, except the index of a stratum research. In this research, I will make use of sociological description of attendance, exploring the issue of regional difference. Subsequently I will analyze attendee's first experiences vis-a-vis the concert. Finally I will specify the features of attendance in relation to those classified as "Jouren" i. e. regular goers and those labeled "Ichigen" i. e. first-timers. I will analyse the differences between them in light of a number of sociological indicators and their musical experiences during their formal education. As a kind of pilot study, I will propose a research framework that could provide a signpost for future research exploration.

## 目 次

はじめに

- I. クラシックコンサートをめぐる社会的背景
- II. 調査の概要とサンプル構成
- III. コンサート会場参集者はどんな人たちか?
  - A. 地域別にみた参集状況と頻度別シェア
  - B. 階層的属性の特徴
    - 1. 年齢層
    - 2. 本人学歴
    - 3. 父親学歴

4. 居住地域

- IV. はじめてのクラシックコンサート
- V. 「常連」と「一見」はどこが違うのか?
  - 1. 年齢層
  - 2. 本人学歴
  - 3. 父親学歴
  - 4. 家庭環境
  - 5. 出身家庭の音楽環境
  - 6. 音楽学習歴
  - 7. クラシック音楽に対するかまえ
- VI. まとめ

はじめに

日本では、いったい誰がクラシックコンサートに行っているのだろうか。

クラシックコンサートの会場に一步足を踏み入れると、クラシックコンサート独特の雰囲気を感じられる。しょっちゅうクラシックコンサートに来ている人にとって、その雰囲気は居心地のいいものだろうし、たまたま来てしまった人は、なんとなく場違いな感じがするにちがいない…。

クラシックコンサートに行ったことのある人ならおそらく誰もが感じたであろう、コンサート会場参集者の醸し出すこの独特の雰囲気は、しかし、これまで十分に明らかにされたことはなかった。そこで本稿では、2002年4月から8月にかけて、東京・新潟・鹿児島3地域において、クラシックコンサート会場参集者を主たる調査対象者に設定して実施したアンケート調査をもとに、クラシックコンサートに行く人たちの特徴を社会的な観点から検討し、クラシックコンサート独特の雰囲気を描き出すことを試みてみたい。

## 1. クラシックコンサートをめぐる社会的背景

近年、我が国の音楽文化、とくにクラシック音楽をめぐる社会状況は大きな変化の時期を迎えている。

1980年代半ば以降、企業によるメセナ活動の一環などでクラシックコンサートが盛んに行われるようになり、1990年代半ば頃からは、廉価なクラシック音楽のCDが発売され、最近では、成人向けの音楽教室が盛んになってきた。また、インターネットの普及で、音楽に関する情報ばかりでなく、コンサートのチケットや音楽ソフトを容易に入手できるようになってきた。このことは、クラシック音楽がより多くの人々に開かれるようになってきたとみることができる。

このような状況は、2001年に施行された「文化芸術振興基本法」のめざす方向性としては、一見望ましくみえる。というのは、資料1にあるように、同法では、文化芸術の振興にあたって、文化芸術活動を行う人の自主性を尊重したり、居住する地域にかかわらず、国民が等しく文化芸術を創造し享受することができるように環境の整備を図ったり、広く国民の意見が反映されるように配慮したりすることを求めているが、より多くの人々に開かれるようになってきたということは、

必然的にこれらの要件が満たされていくことにつながるからだ。

### 資料1 「文化芸術振興基本法」(抜粋)

(基本理念)

第二条 文化芸術の振興に当たっては、文化芸術活動を行うものの自主性が十分に尊重されなければならない。

3 文化芸術の振興に当たっては、文化芸術を創造し、享受することが人々の生まれながらの権利であることにかんがみ、国民がその居住する地域にかかわらず等しく、文化芸術を鑑賞し、これに参加し、またはこれを創造することができるような環境の整備が図られなければならない。

8 文化芸術の振興に当たっては、文化芸術活動を行う者その他広く国民の意見が反映されるよう十分配慮されなければならない。

しかしその一方で、2002～3年度にかけて完全実施された新しい学習指導要領では、小学校・中学校の音楽科の年間標準授業時数が削減され、また中学校・高校ではクラブ活動が廃止されるなど、公教育を通してクラシック音楽を人々が広く平等に学習し、享受し、国民文化として身につける機会が縮小していく方向にあるのもまた事実である。

こういった動きを併せて考えるならば、音楽文化のある部分はますます市場経済化していく一方で、階層文化としての音楽文化を形成していく部分もあったり、さまざまな音楽ジャンル間の境界が不鮮明になる部分とますます特化する部分とに二極化していったりと、21世紀前半にはこれまでとは異なる音楽文化が形成されていくと予想される。

クラシック音楽はこれまで、学校教育によって「西洋起源の正統文化」(米澤2000)として確立してきた。それが学校以外の媒体を主たる手段として国民に普及するようになっていった場合、テレビの音楽番組、CDやDVD、インターネットなどの媒体に乗り、ライブやコンサートもそれらと連動して開催されるポピュラー音楽とは、創造や享受のされ方が異なっていくのではないだろうか。ポピュラー音楽がますます市場性を高める一方で、テレビの音楽番組、CDやDVDの発売などとの連動が薄いクラシック音楽、なかでもと

くに一回性の演奏芸術であるクラシックコンサートは、階層文化としてある階層に閉じられたものになっていく可能性はないだろうか。

こういった可能性を探るにあたっては、議論の前提として、今、クラシックコンサートに行っている人が誰で、音楽文化としてどのような位置づけにあるのかを明らかにする必要がある。しかし、我々の手元には、冒頭に述べた「独特の雰囲気」にみられるように、実はこれまでもクラシック音楽やクラシックコンサートがある特定の階層に閉じられてきていたように思えるという実感はあるものの、管見する限り、クラシック音楽業界のマーケティングレベルでも学術レベルでも、これらの点について実証的に検討したものは非常に少ないのだ。

まず、クラシック音楽業界のマーケティングレベルをみてみよう。クラシックコンサートの主催者やコンサート会場が用意するアンケートには、たしかにコンサートに対する感想の他に、性別や年齢、職業などを記入する欄がある。しかし、あのアンケートは、感想を参考にするほか、連絡先を入手してDM送付に使えるようにするのが主な目的で、せっかく尋ねたコンサート会場参集者の属性の情報は単純集計する程度で、あまり有効に利用されているとは思えない。参集者の側も、一度書けば十分と心得たもので、回収率は1割程度ということが多いようだ。

もちろん、本格的なマーケティング調査を行った例もないわけではない。社団法人日本クラシック音楽マネジメント協会が中心になって平成9年に行った「クラシック音楽コンサート市場活性化のための調査研究」や社団法人日本芸能実演家団体協議会が平成10年に行った「舞台芸術の鑑賞行動実態調査」がそれである。前者は、コンサートに足を運ぶ頻度別に、コンサート会場参集者の属性、音楽環境や生活環境、音楽の嗜好性、コンサートに対する意見などの分析を行っている。しかし、調査対象者が協会主催のあるコンサート参集者からの抽出と同協会の会員になっている主催者の顧客リストからのジャンル別抽出からなっており、また回収数も416サンプルと少なく、代表性にやや問題があるうえ、参集者の属性の分析よりも音楽環境や生活環境、音楽の嗜好性といった特性の分析が中心になっている。そのため、クラシックコンサート「独特の雰囲気」を捉えきれていない。後者は、一般の人々を対象にした社会調査方式で東京と岡山市の比較調査として行っている。しかし、舞台芸術全般に関する調査のため、クラシック音楽やクラシックコンサートに関する

質問は少なく、また内容もクラシック音楽の鑑賞行動に焦点化した市場調査となっていて、誰がクラシックコンサートに行っているのかを捉えきれていない。

次に、学術レベルをみてみよう。

音楽教育学においては、音楽学習歴とその後の音楽活動との関係を検討した研究が散見される。例えば、杉江(1995)は、アマチュア合唱団員を対象に「成人のアマチュア音楽活動に関する調査」を実施して、学校の音楽教育が音楽への興味や愛好心を育てるかたちで、その後の音楽行動に対して一定の機能を果たしていることを明らかにした。だが、調査対象となっている合唱という表現活動に関わっている成人は、クラシック音楽に直接関わる人々のなかでも非常に特殊な集団である。成人に最も多くみられる音楽行動は鑑賞行動のはずだが、音楽教育学の研究において、ある特定の鑑賞行動を取る人々の属性や音楽学習歴との関係を検討した実証研究はほとんどないのが実態だ。

一方、社会学や教育社会学の領域では、階層文化のひとつの指標としてクラシック音楽に対するかまえを実証的に分析する研究がある程度行われてきている。そこでは、クラシック音楽が我が国の「正統文化」にあたるかどうかという点については少なからず批判がなされているものの、その批判を認めたとうえで、「一般的には我が国においても、クラシック音楽は正統文化の一翼を担う文化であり、相対的には高い社会階層に属する人々の趣味と見なされる傾向がある」(米澤2000)と捉えられてきている。

社会学や教育社会学において人々のクラシック音楽に対するかまえやクラシックコンサートへの参集状況を捉える方法は、米澤(2000)によれば、2つある。

ひとつは、一般社会の人々を対象に社会調査を行い、彼らの属性や行動経験と音楽行動や音楽に対する意識との関係を探っていく方法である。

例えば、藤田他(1987)は、ブルデューたちによって提起された文化の階層性と文化的再生産の問題を実証的に研究するべく、ブルデューの実証研究と比較可能なかたちで、1987年に調査を実施した。彼らは、クラシック音楽のコンサートに行くことは、さまざまな文化活動のなかで文化評価として最も高いこと、また実際の行動面でも、父親職業を指標とした出身階層による差が顕著に大きく、高い階層の出身者に限定される傾向が強いことを明らかにした。しかし、彼らの調査は、大学生を対象に行ったもので、サンプルの代表性と分析結果の信頼性に不安が残るものであった。

また、加藤他(1995)は、「生活時間および芸術文化に

関する市民ニーズ」という調査を神奈川県横浜市と川崎市で実施して、生活時間のなかでの余暇の過ごし方の一例として、現時点での文化的な階層とクラシック音楽の鑑賞や演奏活動をはじめとする芸術文化活動との関係を検討した。

そういった研究のなかで、クラシックコンサートに行くという行動の社会的特徴を明らかにすることに焦点化したフレームワークで調査研究したものとして、米澤(2000)の研究が挙げられる。米澤(2000)は、日本における正統文化の二重性、つまり開国以前からの伝統をもつものと開国後の近代的教育システムの成立とほぼ並行して確立していったものの2種類があり、それぞれを担う社会集団にずれがあるという考え方をふまえて、SSM調査のデータをもとに、クラシックコンサート参加者の社会的特徴を分析して、西洋起源の正統文化である「クラシックコンサートに行くこと」は、ある特定の階層に閉じられた文化ではなく、「市場に立脚する正統文化」とみることができるのではないかと論じたのである。

もうひとつは、クラシック音楽に直接関わる人々やコンサート会場参加者を対象にその属性や行動経験や意識を調べる方法である。この方法を美術館で行ったのが、ブルデュエたちの『美術愛好』(訳書1994)であり、同様の枠組みを用いて日本で調査を実施したのが山下(1998)である。山下(1998)は、美術館を訪れる観衆には高学歴者の割合が高いことを明らかにしたが、加えて初めての美術館訪問の時期とそのときの同伴者を探ることで、家庭環境が高学歴と美術館訪問の両方を生み出す要因であることを明らかにしている。また、この方法をクラシックコンサートで行ったものとしては、米澤(2000)によれば、1998年に東京工業大学の矢野眞和研究室がKフィルの5回の演奏会で行った調査がある。

ところで、米澤(2000)も指摘するように、この2つの方法で得られたコンサート会場参加者の姿には明らかなギャップがみられる。例えば、コンサート会場参加者の学歴をみると、高学歴者の割合は、SSM調査に基づく米澤(2000)の分析では、男性が44.2%、女性が29.5%なのに対して、Kフィルの調査では、5回の演奏会で55.8%~72.7%だったのだ。

この結果は、データ収集方法のバイアスによる部分もあるだろう。つまり、一般社会の人々を対象に調査をした場合、調査票の設計上、クラシック音楽やクラシックコンサートに非常に高くコミットしている人たちの情報を調査データに十分に汲み上げることができ

ない一方、コンサート会場参加者を対象に調査すれば、今度は、クラシックコンサートに足を運ばない人たちの情報が調査データからすっぽり抜け落ちてしまうためと考えられる。

しかし、それに加えて、学歴格差などの地域性もギャップを生み出した要因のひとつと考えられるのではないだろうか。なぜなら、米澤(2000)の分析は、SSM調査のデータをもとに、クラシックコンサートへの関わり方を全国均一にみている。しかし、各地のコンサート会場の数やコンサートの開催状況や都道府県ごとの社会的特徴の差異をみれば、全国均一に扱うといくつかの社会的なバイアスを消してしまいかねないことが予想される。また一方で、Kフィルの調査は、首都圏に位置する県で行われたもので、全国の平均的な姿というよりは、その県特有の社会的特徴が色濃く出ている可能性が否定できないからである。

ポピュラー音楽と比べて、テレビの音楽番組、CDやDVDなどの複製芸術と一回性の演奏芸術であるコンサートのもつ意味合いが大きく違うクラシック音楽の場合、コンサート「独特の雰囲気」を探るべく、コンサート会場参加者の社会的特徴を明らかにする際には、全国を均一に扱ったり、例えば首都圏など1地域のみで調査をしたりしただけでは、適切な姿を浮かび上がらせることは難しそうだ。地域性、それに伴う社会的特徴の違い、コンサート会場の数やコンサートの開催状況の違いなどをふまえて、コンサート会場参加者の特徴を描き出す必要があるのではないだろうか。

以上のようなクラシックコンサートをめぐる社会的背景に対する理解と問題関心から、筆者は、東京・新潟・鹿児島においてクラシックコンサート会場参加者に対してアンケート調査を実施した。なお、このような方法と対象による大がかりな調査は、これまで蓄積がないことから、この調査をパイロット・スタディと位置づけて、本稿では、とくに3地域の違いに考慮しながら、以下の3点の分析を行うこととする。すなわち、第一に、コンサート会場参加者の社会的特徴の記述的な整理を行う。第二に、彼らが初めてクラシックコンサートに行ったときの様子とその社会的特徴を明らかにする。第三に、コンサート会場参加者を「常連」と「一見」に分けて、両者の相違点を社会的特徴などの属性と音楽学習歴やクラシック音楽に対するかまえなどの特性から分析していく。

## II. 調査の概要とサンプル構成

前章で設定した、クラシックコンサート会場参集者の特徴を社会的特徴などの属性と音楽学習歴やクラシック音楽に対するかまえなどの特性から明らかにするという課題に取り組むべく、以下のような概要で2002年度にアンケート調査を実施した<sup>1)</sup>。

・調査題目：「成人の音楽学習歴と音楽行動に関するアンケート」

・調査対象：クラシックコンサート会場参集者

・調査時期：2002年4月～8月

・調査地域：東京都23区内、新潟市、鹿児島市

調査は、東京都23区内では5会場9コンサートで実施し、新潟市では1会場1コンサートで実施した他、会場の「友の会」会員に対して郵送調査を行い、鹿児島市では1会場1コンサートで調査を実施した<sup>2)</sup>。調査対象者のサンプル構成は図表1のとおり。なお、回収率は会場ごとに約5%～約30%とまちまちであった。

図表1 サンプル構成 (人)

	東京	新潟	鹿児島	全体
男性	541	257	82	880
女性	671	336	177	1,184
合計	1,212	593	259	2,064

調査地域として、東京都23区内、新潟市、鹿児島市の3地域を選定した理由は次のとおりである。東京都23区内は、最も人口が多いこと、コンサート会場の数やコンサートの開催数が最も多いこと、またこれまでの調査も首都圏で行われているものがあることから、調査地域として選定した。新潟市と鹿児島市については、地域性を考慮して以下の条件から選定した。第一に、都市規模については、大都市圏と中規模の都市という比較軸を設定した。都道府県庁所在地のうち、政令指定都市など東京と似ている傾向のある大都市圏をはずした。また、同じ都道府県内に都道府県庁所在地と同規模の市部がある地域や人口の非常に少ない地域をはずした。第二に、コンサート会場の数やコンサート開催状況の違いを考慮した。クラシック音楽等に関する情報誌『ぶらあほ』に掲載されている各都道府県のクラシックコンサート開催情報をもとに、週1回程度開催されている地域と月1回程度開催されている地域を選んだ。第三に、周辺地域からのアクセス可能性に

留意した。当該地域の社会的特徴を検討するには、隣県からのコンサート参集者が少ない方がよい。そこで隣県の県庁所在地からの移動時間が1時間程度以内の地域をはずした。第四に、当該地域における調査実施経験の有無を考慮した。第三までの条件を充たす地域のうち、これまで筆者がなんらかの調査を実施したことのある地域を選んだ。

また、東京23区内では5会場9コンサートで調査を実施しているが、できるだけ多様な会場とジャンル、演目、出演者が含まれるようにした。つまり、会場は、定員1000人を超えるような大ホール3会場と500人程度以下の中小ホール3会場で実施した<sup>3)</sup>。ジャンルは、オーケストラ、室内楽、器楽曲の独奏や共演などを含むようにした。演目は、専門性の高い曲で構成されているコンサートから誰もが知っているような曲で構成されているコンサートまで含むようにした。出演者は、外国から来日した演奏家や日本の一流の演奏家による公演からまだ駆け出しの演奏家による公演まで含むようにした。なお、1コンサートでしか調査を行っていない新潟市と鹿児島市については、新潟市は国内の一流オーケストラの公演、鹿児島市は日本人による声楽の公演であった。

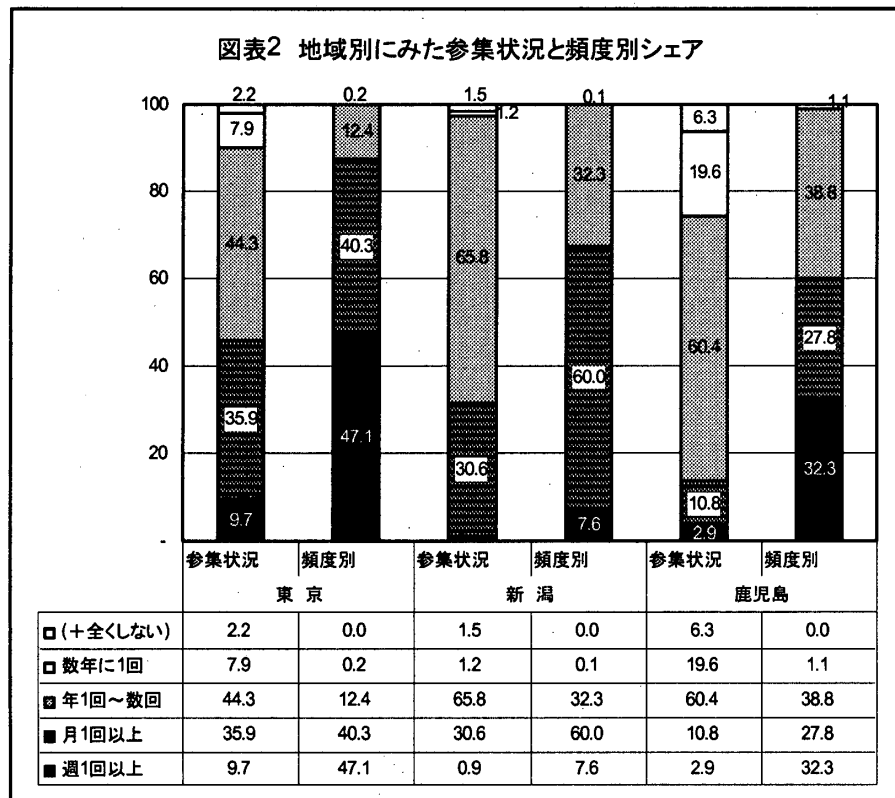
## III. コン서트会場参集者はどんな人たちか？

### A. 地域別にみた参集状況と頻度別シェア

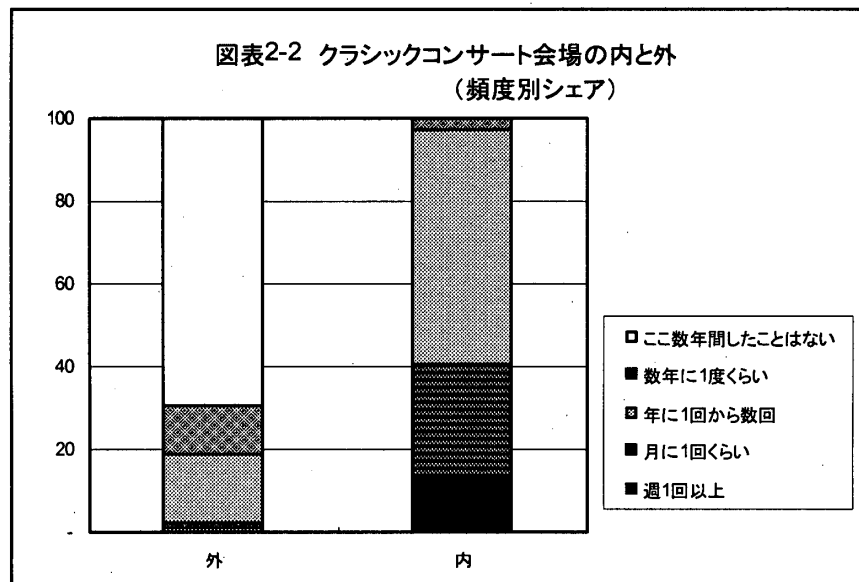
コンサート会場参集者はいったいどのくらいの頻度でクラシックコンサートに通っているのだろうか。参集状況を図表2から地域別にみてみよう。

まず、頻度の高い人の割合をみると、東京では、「週1回以上」が9.7%、「月1回以上」が35.9%と、あわせて半数近くに上るのに対して、新潟では、「週1回以上」が0.9%、「月1回以上」が30.6%、また鹿児島では、「週1回以上」が2.9%、「月1回以上」が10.8%となっていて、しょっちゅうクラシックコンサートに行っているような人は、新潟や鹿児島では東京に比べてかなり少ないことがわかる。また、「年1回～数回」というような、ときどきクラシックコンサートに行く人の割合は、東京では44.3%、新潟で65.8%、鹿児島で60.4%である。

東京と新潟や鹿児島でこのように差がみられた理由は、単に東京の人々の方がクラシック音楽に親和的であるとか積極的に関わろうとしているということではないだろう。東京では、毎日のように多くの会場でクラシックコンサートが行われているのに対して、新潟



※頻度別シェアは「週に1回以上」は年に52回、「月に1回以上」は年に12回、「年1回~数回」は年に3回、「数年に1回+全くしない」は年に0.2回として算出した。



※米澤(2000)230頁より図7-1を抜粋

や鹿児島では、少ない会場でしかもときどきしかクラシックコンサートは行われていない。このような地域性を考慮すると、例えば「年1回~数回」という頻度のもつ意味合いは、東京と新潟や鹿児島ではずいぶん違って、もしかすると、新潟や鹿児島の「年1回~数

回」の方の方がクラシック音楽に親和的だったり、積極的に関わろうとしたりしているかもしれないのである。この数値の意味合いについては、今後もより深い調査分析を重ねることで明らかにしていく必要があるだろう。

ところで、地域による違いだけでなく、コンサートによっても、参集者のコンサート通いの頻度が異なっているということはないだろうか。2つの例を出してみることにしよう。

ひとつめの例は、大ホールの会場における①モーツァルトのピアノ四重奏などの演目のコンサートと②マーラーの交響曲などの演目のコンサートである。それぞれの頻度をまとめてみると、①「週1回以上」：8.4%、「月1回以上」：29.8%、「年1回～数回」：50.2%（以下略）、②「週1回以上」：8.1%、「月1回以上」：36.9%、「年1回～数回」：44.4%（以下略）、となっていた。

ふたつめの例は、別の大ホールの会場における③世界的に評価の高いソリストたちが出演するやや専門性の高い演目で最も高いチケットは16000円のコンサート、④外国の室内楽団に日本の有名なソリストが加わり、誰もが知っている演目で最も高いチケットは6000円のコンサートである。それぞれの頻度をまとめてみると、③「週1回以上」：20.7%、「月1回以上」：41.4%、「年1回～数回」：37.9%、④「週1回以上」：8.9%、「月1回以上」：32.9%、「年1回～数回」：50.6%、（以下略）、となっていた。

①②④の頻度が非常に似ているのに対して、③は、調査回答者のみに限定されているとはいえ、「数年に1回」以下の参集者は皆無で、高頻度に偏っている。出演者や演目が違えば、そのコンサートの参集者のコンサート通いの頻度には違いがみられることがわかった。このことから、コンサートによって参集者にクラシックコンサートへの関わり方の違いがみられるということがいえそうだ。

さて、ここまでみてきた参集者のコンサート通いの頻度は、1回のコンサートにそのような頻度でクラシックコンサートに通っている人がそのくらい会場に来ているということを表して、たしかに高頻度の人々がコンサート会場に占める割合がけっこう高いことはわかる。しかし、これだけではどうもあのクラシックコンサート「独特の雰囲気」を描き出しているように思えない。それは、米澤(2000)によれば、「誰がどの程度の頻度で(中略)コンサート会場に通っているかを考慮に入れていない。つまり、毎週のように通っている人も、めったに足を運ばないがその日たまたま来た人も、同じ重みでカウントされるからである」という。そこで米澤(2000)は、コンサート会場参集者の構成について頻度別シェアをみることで、「常連」の存在を浮かび上がらせ、コンサート会場の雰囲気を捉えようと試みたのである。では本稿でも、米澤(2000)と同じ方法で頻

度別シェアをみてみよう。

図表2のように、東京のコンサート会場は、個々のコンサートでの調査結果を単純にみれば、「週1回以上」と「月1回以上」をあわせても半数に及ばなかったのだが、これを頻度別シェアでみると、「週1回以上」が47.1%、「月1回以上」が40.3%となって、コンサート会場参集者は、「月1回以上」コンサートに行っているような相当な「常連」でほとんど構成されていることになる。

「数年に1回」以下しかコンサートに足を運ばない人は、どのコンサートにも何%かはいるが、そういった人たちはコンサートごとに入れ替わっていくのに対して、繰り返し聴きに来る「常連」がコンサート会場にいつもこんなにたくさんいるからこそ、あの「独特の雰囲気」が醸し出されるのではないだろうか。このように、「常連」が固定客となっていることで、クラシックコンサートが成り立っているようすがうかがえる<sup>4)</sup>。

一方、新潟や鹿児島県の頻度別シェアは、新潟が「週1回以上」=7.6%、「月1回以上」=60.0%で、鹿児島が「週1回以上」=32.3%、「月1回以上」=27.8%と、「月1回以上」コンサートに行っているような相当な「常連」の割合は、東京と比べてやや低い。しかし、コンサートの会場数や開催数が少ないことを考慮すると、コンサート会場参集者は、東京以上に「顔なじみ」で構成されている可能性が高い。つまり、コンサート会場や開催数の多い東京では「常連」がさまざまな会場やコンサートに分散するが、新潟や鹿児島では、常に同じ会場に同じ顔が揃っていると考えられるのだ。ということは、地方のコンサート会場の方が、会場で感じる「常連」の占有率は東京よりも高く、「独特の雰囲気」も色濃いかもかもしれない。

ちなみに、SSM調査に基づいて全国均一にみた米澤(2000)の頻度別シェアは、「週1回以上」が13.5%、「月1回以上」が27.1%などとなっており、3地域の結果をふまえると、全国をならしてみれば、このような数値になってもおかしくなさそうだ。

## B. 階層的属性の特徴

次に、コンサート会場参集者の階層的属性の特徴を、年齢層、本人学歴、父親学歴、居住地域を例に整理してみよう。

### 1. 年齢層

コンサート会場参集者の年齢層について、図表3からまず地域別にみると、30才代以下は、東京ではコン

サート会場参集者全体の3分の1強を占めるが、新潟や鹿児島では15%内外にとどまっています、東京の半分に満たない。その一方で、50才代以上は、東京では5割を切っているのに対して、新潟で6割、鹿児島で7割と、新潟と鹿児島では高年齢層の占める割合が高くなっている。

図表3 地域別・性別にみた年齢層の構成 (%)

	東京			新潟			鹿児島		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
20才代以下	10.9	21.7	16.9	2.7	8.4	6.0	7.4	11.0	9.8
30才代	15.4	21.4	18.7	6.7	14.2	10.9	1.2	6.9	5.1
40才代	16.7	17.1	16.9	19.6	19.6	19.6	4.9	20.2	15.4
50才代	22.0	25.2	23.8	22.7	28.0	25.7	37.0	27.7	30.7
60才代	25.9	12.1	18.3	34.1	23.5	28.1	37.0	23.7	28.0
70才代以上	9.0	2.4	5.4	14.1	6.3	9.7	12.3	10.4	11.0
合計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

性別では、地域を問わず、男性よりも女性の方が若年層の割合が高い。とくに東京の30才代以下をみると、男性の26.3%に対して女性は43.1%にも上っている。鹿児島では、30才代以下は男性が8.6%で女性が17.9%と若年層で大きな差はみられないが、50才代以上では、女性が61.8%なのに対して男性が36.3%と大きな差がみられ、男性の参集者が高年齢層に大きく偏っていることがわかる。

なお、詳細の記述は省略するが、東京ではコンサートによっても若干の年齢層の違いがみられ、例えば前項で例示した①②④に比べて③が若年層に偏っていた<sup>5)</sup>。

この結果は、SSM調査に基づく米澤(2000)では50代以上が3割強、美術館参集者に対して行った山下(1998)の調査では30才代以下が55%で50才代以上が28%だったのと比べると、年齢層の構成が高年齢に偏り、若年層が少ないのが特徴だ。米澤(2000)との違いは、調査方法の違いによるもの、つまり、若年層にコンサートに通う頻度の低い人が多いためと考えられる。また、美術館参集者との違いは顕著で、クラシックコンサートに行くことと美術館に行くことは、同じような芸術文化の鑑賞活動に括られがちだが、この年齢層構成の違いは、クラシック音楽と美術とでは芸術文化活動の行動様式や意味づけに大きな違いがあることを示唆していよう。

## 2. 本人学歴

コンサート会場参集者の本人学歴について、まず図

表4から地域別にみてみよう。大卒以上は、東京では約75%なのに対して新潟と鹿児島では5割弱で、東京に比べて新潟や鹿児島の大卒者の割合は低い。しかし、調査対象者の出身地は多様であるから直接の比較はあまり意味がないかもしれないが、都県別の大学進学率との比率を考えると、つまり、一般にどの時期も東京は全国平均より10~15ポイント高く、新潟や鹿児島は10ポイント前後低いことをふまえると、東京よりも新潟や鹿児島の方が、その地域の学歴構成に対してコンサート会場が高学歴者で占められている比率は高いと考えられる。

図表4 地域別・性別にみた本人学歴の構成 (%)

	東京			新潟			鹿児島		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
中学校	1.0	0.5	0.7	1.2	1.0	1.1	1.3	0.7	0.9
高校	6.0	14.3	10.5	26.4	33.3	30.3	7.5	28.0	20.6
短大・専門	2.9	21.8	13.3	6.8	31.4	20.5	11.3	44.8	32.7
大学・大学院	89.4	63.2	75.1	64.8	34.3	47.8	80.0	26.6	45.7
その他	0.8	0.2	0.4	0.8	0	0.4	0	0	0
合計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

また性別では、東京の大卒以上の割合は、男性の89.4%に対して女性が63.2%で25ポイントほどの差がある。新潟と鹿児島の女性の大学以上の割合をみると、新潟が34.3%で鹿児島が26.6%と、まず、東京の女性に比べて約半分にすぎず、また当該県の男性の大卒以上の割合と比べると、新潟では約30ポイント、鹿児島では50ポイント以上低い。3都県間の大学進学率や各都県の大学進学率の男女比はこれほど開いていないことを考えると、一般に学歴と文化活動の間には相関がみられると言われているが、学歴とクラシックコンサートに行くという行動の相関の様子には、地域によって、また性別によって違いがあり、クラシックコンサートに行く要因が他にもあるということが予想される。

次に、図表5から年齢層別にみてみよう。50才代以上の大卒以上の割合を地域別にみると、東京はどの年代でも70%台、新潟は50才代と60才代が40%台で70才代以上が30%弱、鹿児島は50才代がちょうど50%、60才代が40%強、70才代以上が約30%となっている。現時点での大学進学率の全国平均が40%台前半で、1960年代前半までは10%程度以下だったことを考えると、どの世代でも当該年齢層全体の学歴に対してコンサート会場参集者の学歴は高いが、とくに高年齢層における高学歴者の占有率は非常に高くなっているとい



図表5 地域別年齢層別にみた本人学歴の構成 (%)

		20才代 以下	30才代	40才代	50才代	60才代	70才代 以上
東京	中学校	1.1	0	0	0.7	0.9	3.3
	高校	10.4	4.8	8.3	13.2	13.7	16.7
	短大・専門	7.1	16.3	17.1	15.8	9.0	10.0
	大学・大学院	80.2	78.5	74.1	70.2	75.9	70.0
	その他	1.1	0.5	0.5	0	0.5	0
	合計	100	100	100	100	100	100
新潟	中学校	0	0	0	0.7	1.9	3.8
	高校	15.6	20.3	18.4	36.1	36.3	40.4
	短大・専門	25.0	22.0	18.4	22.4	17.2	25.0
	大学・大学院	59.4	55.9	63.2	40.8	44.6	28.8
	その他	0	1.7	0	0	0	1.9
	合計	100	100	100	100	100	100
鹿児島	中学校	0	0	0	0	1.6	4.3
	高校	8.7	18.2	17.1	21.2	22.6	34.8
	短大・専門	34.8	45.5	37.1	28.8	32.3	30.4
	大学・大学院	56.5	36.4	45.7	50.0	43.5	30.4
	合計	100	100	100	100	100	100

には鹿児島県の比率が高く、クラシックコンサートに行くという行動と階層との結びつきが、東京や新潟よりやや強いようだ。出身階層によって、すでにクラシックコンサートに行くかどうかがある程度規定されてしまい、地方ほどその傾向が強いと考えられる。

図表6 地域別年齢層別にみた父親学歴 (%)

		20才代 以下	30~40 才代	50才代	60才代 以上
東京	中等教育卒	18.9	42.8	43.2	39.3
	中等後／高等教育卒	81.1	57.2	56.8	60.7
	合計	100	100	100	100
新潟	中等教育卒	54.8	73.8	67.4	56.4
	中等後／高等教育卒	45.2	26.2	32.6	43.6
	合計	100	100	100	100
鹿児島	中等教育卒	31.8	40.5	60.7	56.3
	中等後／高等教育卒	68.2	59.5	39.3	43.8
	合計	100	100	100	100

また、年齢層別にみると、興味深いことに、3都県とも20才代以下から50才代にかけて「中等後／高等教育卒」の割合は低くなっていく傾向にあるのに、60才代以上ではその割合が50才代よりも高くなっているのだ。現在60才代以上の方の父親学歴がそれほど高学歴に偏っているということは、当時の学歴の状況を見ると、高年齢層では、クラシックコンサートに行くという行動が高学歴者からなる高い階層にかなり強く閉じられていると考えられるのではないだろうか。

#### 4. 居住地域

コンサート会場参集者の居住地域を、都県庁所在地、市部、郡部に分けて整理したところ、図表7のようになった。つまり、東京では首都周辺の4都県の都県庁所在地在住者が6割弱なのに対して、新潟や鹿児島では県庁所在地在住者が7割を超えていて、市部や郡部の居住者の割合が低くなっている。なお、鹿児島で郡部の割合が高いのは、鹿児島市が郡部に囲まれているためだ。

今回調査したコンサートは全て都県庁所在地で開催されたものなので、ある意味では当然の結果だが、実際、クラシックコンサートは都県庁所在地で開かれる割合が非常に高いのも事実である。加えて、「生活時間および芸術文化に関する市民ニーズ」について調査をした加藤他(1995)が指摘するように、居住地とコンサート会場との所要時間を考慮すると、同じ県内であっても都県庁所在地居住者に比べて市部や郡部の居住者

える。

なお、SSM調査に基づく米澤(2000)では、高卒より上が男性で4割強、女性で3割弱、美術館参集者に対して行った山下(1998)では7割弱で、60才代以上でも5割弱だった。美術館参集者と比較すると、高学歴者の割合が高かった点に加えて、高年齢層の高学歴比率が高い点が一致する。

#### 3. 父親学歴

藤田他(1987)によれば、出身家庭の階層によって文化活動への関与の様子は異なり、文化評価の高い活動ほど、出身家庭の階層の高い人に限定される傾向にあるという。そこで、コンサート会場参集者の出身家庭がどのような階層なのかをみてみよう。藤田他(1987)は、出身家庭の階層の指標として父親の職業を用いているが、ここでは父親学歴を用いることとする<sup>6)</sup>。

図表6から地域別年齢層別に父親学歴をみてみると、高校卒より上の「中等後／高等教育卒」の割合は、東京では50%台後半から80%強、新潟では20%台半ばから40%台半ば、鹿児島では40%弱から70%弱となっている。地域差や世代差はあるものの、父親の学歴は全国平均と比べて非常に高い。細かくみていくと、地域別

表7 地域別にみた居住地域 (%)

	東京		新潟		鹿児島	
	首都4都県	その他の県	新潟県	その他の県	鹿児島県	その他の県
都県庁所在地	59.0	38.8	75.5	33.3	70.5	70.0
市 部	38.4	51.3	13.6	66.7	9.4	30.0
郡 部	2.7	10.0	10.8	0	20.1	0
合計 (実数)	100.0 (975)	100.0 (80)	100.0 (572)	100.0 (3)	100.0 (224)	100.0 (10)

※首都4都県は、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県。

がコンサート参集者に占める比率は少なくなってしまうと考えられる。

例えば、美術館であれば、日中ずっと開館していて、開館している間であればいつでも展示を見ることができ、展示期間も長いので、自分の時間の都合に合わせて足を運ぶことができる、また、居住地と美術館が離れていても、休日を使って美術館を訪れることは可能だ。しかし、クラシックコンサートは、演奏しているときにしか聞くことができない時間芸術であるため、1回限りのコンサートの公演時間に自分の都合を合わせねばならない。それに、多くのコンサートは午後7時頃から9時頃にかけて開かれるため、平日ならば、開演時間に間に合うように職場を離れねばならないし、帰宅時間を気にしながら公演を聴かねばならない。このように、クラシックコンサートに足を運べるかどうかは、どこに住んでいるかによっても強く規定されてしまうのである。

米澤(2000)は、大都市圏とそれ以外の居住地域を都

道府県単位で分けてクラシックコンサート参集者の属性を分析して、大都市圏以外の居住者を排除するものではないと論じた。しかし、首都圏を除けば、県を超えての移動を伴ってコンサートを聴きに行くということはまだであり、都道府県間ではなく、都道府県内の居住地域格差こそが問題にされるべきだろう。

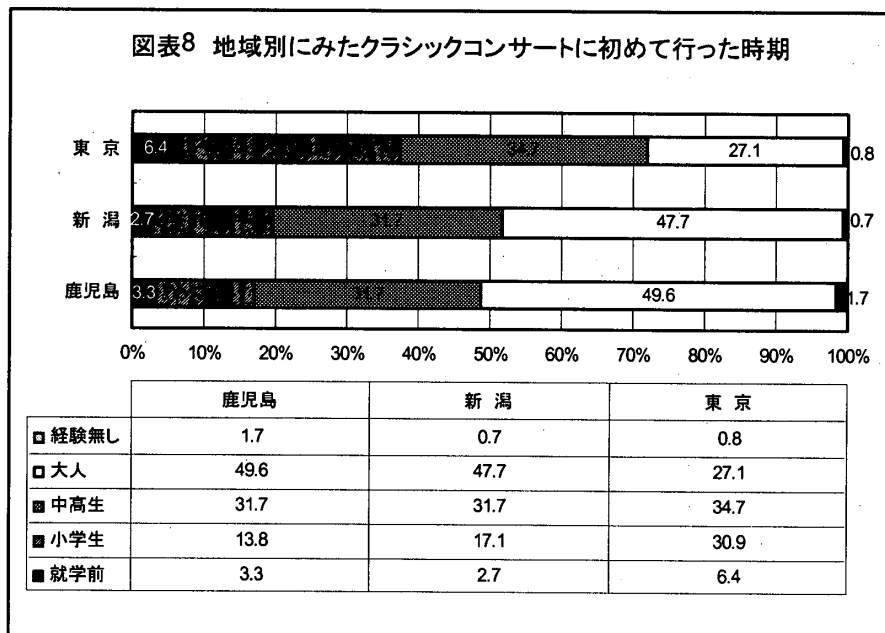
以上の階層的属性に関する分析から、コンサート会場参集者の特徴を描き出すならば、都市部に住む高齢で高階層出身かつ高学歴者の「常連」中心に構成されているということができよう。こういう特徴を兼ね備えた人たちがコンサート会場が満たされているから、クラシックコンサートは、あの「独特の雰囲気」が醸し出されるのだろう。だが、このような特徴も、地域別やコンサート別にみたり年齢層別や性別に捉えたりすると、少しずつ違っていることもまたわかった。こういった違いは、クラシックコンサートやクラシック音楽に対するかまえの違いにもつながっているはずなので、これから、これらの違いの要因を明らかにできるような精緻な調査と分析を積み重ねていく必要があるだろう。

#### IV. はじめてのクラシックコンサート

前章までの分析から、コンサート会場参集者は、都市部に住む高齢で高階層出身かつ高学歴者の「常連」中心に構成されていることが分かった。

では、コンサート会場参集者がクラシックコンサートに初めて行ったのはいつ頃だろうか。とくに、クラシックコンサートを主として支えている年配の世代が

図表8 地域別にみたクラシックコンサートに初めて行った時期



図表9 年齢層別にみたクラシックコンサートに初めて行った時期 (%)

	20才代以下	30才代	40才代	50才代	60才代	70才代以上
就学前	15.4	5.8	3.1	3.6	2.0	2.8
小学生	45.6	39.3	28.2	20.3	9.7	11.9
中高生	27.0	27.1	35.9	33.0	41.3	32.2
大人	10.4	25.4	31.6	42.7	46.7	53.1
経験無し	1.5	2.4	1.1	0.4	0.2	0
合計	100	100	100	100	100	100

若かったころには、今ほど頻繁にクラシックコンサートは開かれていなかったはずである。彼らはいったいつからクラシックコンサートに行くようになったのだろうか。

図表8と図表9に地域別と年齢層別に、初めてクラシックコンサートに行った時期をまとめた。全体の傾向としては、「小学生以下(就学前+小学生)」「中高生時代(中高生)」「大人になってから(大人)」の大きく3つの時期に分けられる。しかし、地域別にみていくと、東京では7割が中高生時代までにクラシックコンサートに行った経験があるのに対して、鹿児島と新潟ではほぼ半数が大人になってから初めてクラシックコンサートに足を運んでいる。この差を生んでいるのは小学生の時期で、東京では30.9%が小学生のときに初めて行っているが、新潟や鹿児島で小学生のときに初めて行った人は15%内外と、東京の半分にすぎない。

年齢層別にみると、小学生までに初めて行った割合は、60才代以上では1割ほどだが、50才代で2割強、40才代で3割強、30才代で4割強、そして20才代以下では6割強である。逆に大人になってから初めて行った割合は、50才代と60才代では4割強で、70才以上では過半数と世代が上がるほど高くなっている。このように、世代が若くなるほどより早い時期からクラシックコンサートに行っているのだが、裏返せば、「常連」のはずの年配の世代は、若い時分から足を運んでいたわけではなく、実は大人になってからなにかをきっかけにクラシックコンサートに初めて接し、「常連」になっていったと考えられるのである。

このことは、クラシックコンサートに行くという音楽行動の意味づけが年配の世代と若い世代では異なっている可能性があることを示唆している。つまり、クラシックコンサートに参入したきっかけから音楽文化のあり方まで世代によって大きく違うと考えられるの

だ。

ところで、山下(1998)は、美術館参集者が初めて美術館を訪問した時期を調査している。それによると、美術館参集者の6割が30才以上であるのに対して、無回答者を除けば、4分の3が中高時代までに、また9割の人が24才までに美術館を体験しているという。東京でも3割が、新潟や鹿児島では半数が大人になってはじめて経験するクラシックコンサートとはずいぶん文化活動の様相が違うことがうかがえる。

次に、初めてクラシックコンサートに行ったとき、誰と一緒にいったのかを図表10からみてみよう。当然のことながら、小学生以下で初めて行ったケースでは、「家族と」一緒にいった、つまり両親に連れられていったという割合が非常に高い。中高生のときに初めて行ったケースでは、「家族と」一緒にという割合が2割強まで大幅に減って、逆に「小学生以前」にはほとんどなかった「友人と」一緒にという割合が38.9%と増えてくる。大人になって初めて行った人の場合は、「友人と」一緒に46.6%で半数近くを占める一方で、「一人で」行った人も25.6%に上っている。また、小学生や中高生の時期に初めて行ったケースでは、「学校行事で」初めてのクラシックコンサートを体験した人が2割強いる点が注目に値する。

図表10 初めてのクラシックコンサートと一緒にいった人 (%)

	クラシックコンサートに初めて行った時期				合計
	就学前	小学生	中高生	大人	
家族と	90.4	67.5	21.3	24.6	37.2
友人と	4.3	3.7	38.9	46.6	31.5
学校行事で	2.1	24.7	22.3	0.9	13.9
一人で	2.1	2.0	16.6	25.6	15.7
その他	1.1	2.2	1.0	2.3	1.8
合計(実数)	100(94)	100(458)	100(628)	100(702)	100(1,882)

小学生以下で初めてのクラシックコンサートを体験している場合、そのほとんどが家族と一緒にいったものであった。ということは、家庭環境の違いによってクラシックコンサートの初体験の時期にも違いがみられるのではないだろうか。そこで、図表11に父親学歴別に初めてクラシックコンサートに行った時期をまとめた。父親学歴が高いと39.9%と5人に2人が小学生までにクラシックコンサートを体験しているのに対して、父親学歴が低いと19.7%と5人に1人とどまっている。逆に大人になって初めてクラシックコンサ-

トを体験する割合は、父親学歴が低いと44.8%と半数近くに上るのに対して、父親学歴が高いと25.5%と4分の1にすぎない。

図表 11 父親学歴別にみたクラシックコンサートに初めて行った時期 (%)

	中等教育卒	中等後高等教育卒	合計
就学前	1.5	8.7	5.3
小学生	18.2	31.2	25.0
中高生	34.2	33.9	34.1
大人	44.8	25.5	34.7
経験無し	1.3	0.6	0.9
合計 (実数)	100 (859)	100 (949)	100 (1,808)

実際、小学生までに初めてクラシックコンサートに行った人が誰と一緒にいったかを父親学歴別にみると、図表にはまとめていないが、父親学歴が高い場合は約8割が家族と行っているのに対して、父親学歴が低い場合は5割強にとどまっていた。その一方で、小学生や中高生時代に学校行事で初めて行ったケースは、父親学歴が高い場合は2割弱だが、父親学歴が低

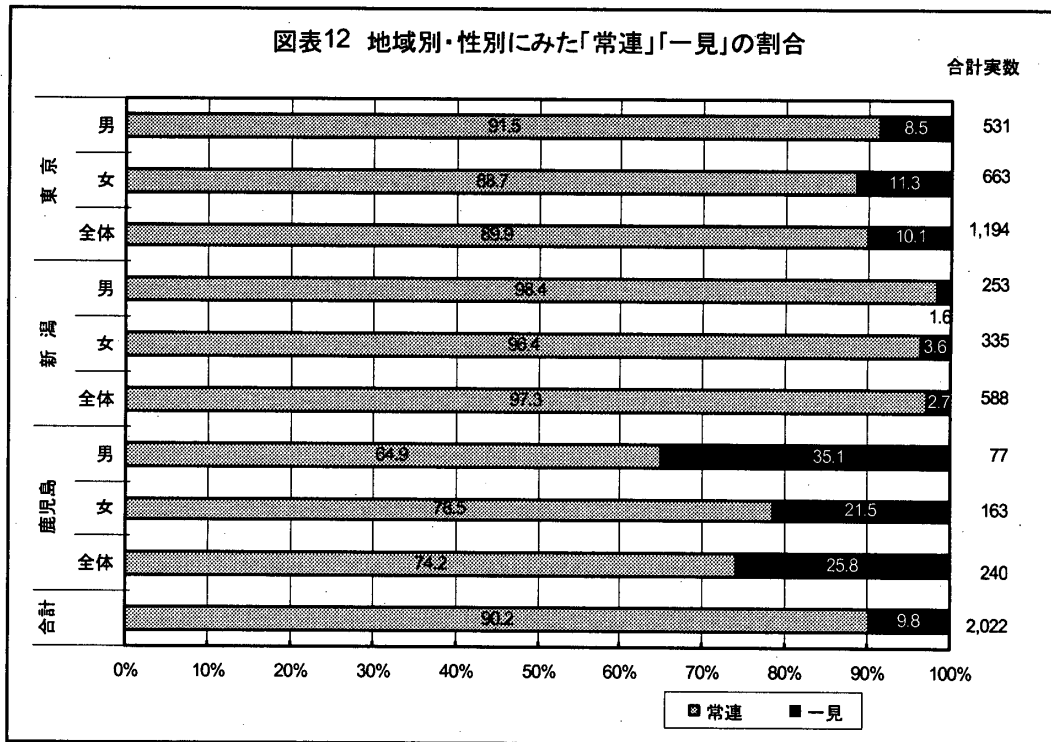
い場合は3割弱と10ポイントほど高かった。つまり、学齢期にクラシックコンサートを体験する機会として、学校行事が家庭環境の差を埋める働きをしているということである。

以上の分析からは、地域や世代によって初めてクラシックコンサートに行った時期が違い、とくに、クラシックコンサートの「常連」となっている年配の世代が、実は大人になってから行くようになっていくことがわかった。また、若いうちにクラシックコンサートを経験した場合の社会的な背景を明らかにすることはできたが、大人になってから初めて行った人がなにをきっかけに足を運ぶようになったのかは明らかにできなかった。この点の解明は今後の課題としたい。

V. 「常連」と「一見」はどこが違うのか？

コンサート会場参集者は、すでにみたように、都市部に住む高年齢で高階層出身かつ高学歴者の「常連」中心に構成されていた。では、たまたまクラシックコンサートに足を運んだ「一見」が会場でもわりの観客に対して閉鎖性や疎外感を感じるほど、「常連」と「一見」では違いがあるのだろうか。属性、家庭環境、音楽学習

図表 12 地域別・性別にみた「常連」「一見」の割合



※「常連」はクラシック音楽のコンサートに「週1回以上」「月1回以上」「年1～数回」行くと答えた人。

「一見」は「数年に1回」「全くしない」と答えた人。

歴、クラシック音楽に対するかまえといった側面からいくつか変数を取りあげて「常連」と「一見」を比較し、「常連」が醸し出すクラシックコンサート「独特の雰囲気」を描き出していくことにしよう。

「常連」と「一見」の区分については、本稿では、図表12のようにやや偏りが大きくなるが、便宜的に「年1～数回」以上クラシックコンサートに行く人を「常連」、「数年に1回」以下の人を「一見」として扱うことにする。このような分け方をした理由は以下のとおり。たしかに、年1回しか行っていないとすれば、それを「常連」とみなすのはやや難があるが、Ⅲ章で検討した頻度別シェアでは、「年1～数回」を年に3回行ったとみなして計算している。年に3回、つまり季節に1回程度足を運んでいるとしたら、新潟や鹿児島のようにコンサートの開催数が少ないところでは、十分に定期的にクラシックコンサートに足を運ぶ「常連」とみていいと考えたからである。

図表12から、各地域の「常連」と「一見」の分布を確認しておこう。東京では、男女を問わず約9割が「常連」で1割が「一見」である。新潟の「一見」は全体でわずか2.7%、実数にすると16人しかいない。これは、調査対象者の設定で会場の「友の会」の会員を含んだことが原因のひとつと考えられる。鹿児島では、男性の「一見」が35.1%、女性の「一見」が21.5%と、「一見」の割合が高く、また男女差もみられる。

なお、新潟は「一見」の実数が少ないので、主に東京と鹿児島とのデータをみていくことにする。

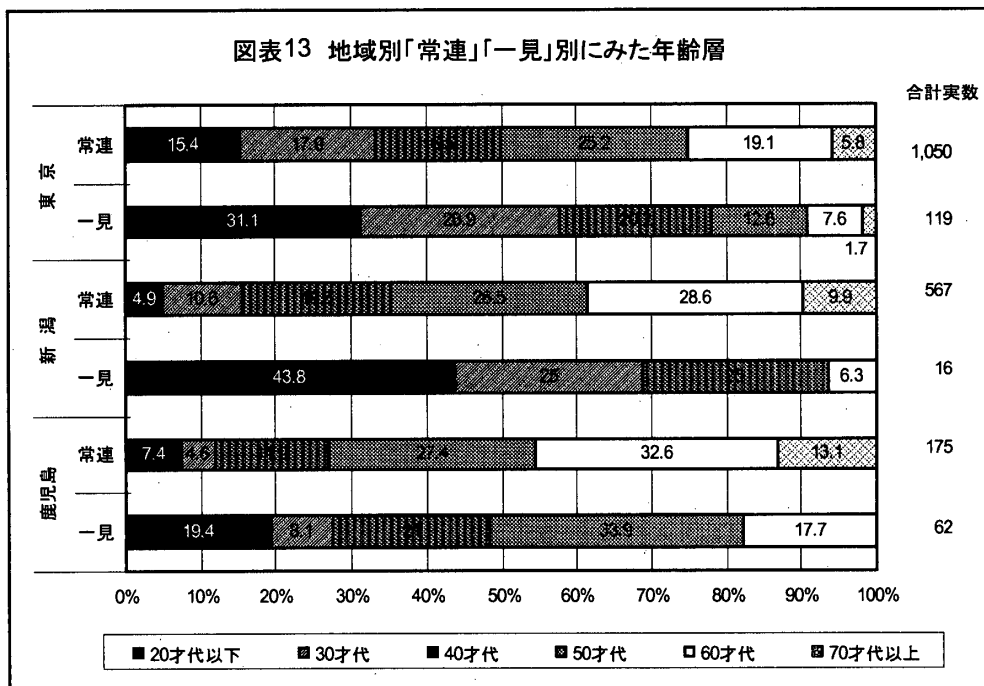
### 1. 年齢層

「常連」と「一見」の年齢層構成はどのようになっているだろうか。図表13のように、地域によって若干違いがあるが、「一見」の方がやや低い。東京では、「常連」の5割強が50才代以上だが、50才代以上の「一見」は2割ほどしかいない。逆に、30才代以下をみても、「常連」では30才代が17.9%で20才代以下は15.4%と、全体の3分の1しかいないが、「一見」では30才代が26.9%で20才代以下が31.1%と半数を超えている。鹿児島では、「常連」の45.7%が60才代以上と、60才代以上で「常連」の半数弱を占め、50才代まで含めると73.1%と、「常連」の4分の3が50才代以上の年配の世代で構成されている。しかし、「一見」では、60才代以上は17.7%にすぎない。かといって、東京のように「一見」の若年層が目立って多いわけでもなく、30才代以下の「一見」は27.5%しかいない。

東京では、30才代以下の若年層が初めてクラシックコンサートに足を運んだとき、コンサート会場の高齢層に偏った年齢層構成のいびつさに違和感を感じるかもしれないし、50才代以上の年配の方であれば、そのままじんで「常連」になっていくかもしれない。鹿児島では、一定程度の年齢にならなければ、クラシックコンサートに「一見」として足を運ぶこともあまりないということだろう。

なお、新潟の「常連」の年齢層構成をみても、50才代以上で38.5%、50才代以上にまで上げると65%と、鹿児島より若干若年層の割合が高いものの、鹿児島と

図表13 地域別「常連」「一見」別にみた年齢層



同様に年配の世代に偏った構成をしている。

## 2. 本人学歴

「常連」と「一見」の本人学歴に違いがあるかどうか、図表14からみてみよう。東京では、「常連」の76.9%が大卒以上だが、「一見」の大卒以上は60%と、「常連」の方が十数ポイントほど大卒者が多い。また「常連」では1割しかいない高卒以下が「一見」では2割いる。このように、「常連」の方が「一見」より本人学歴は高いが、「一見」であっても、首都周辺の4都県の学歴水準よりは高い学歴を取得しているといえるだろう。一方、鹿児島では、大卒以上の割合が「常連」で44.5%、「一見」で52.8%、高卒以下の割合は「常連」で18.7%、「一見」で28.3%となっているが、両者の取得学歴に統計的に有意な差はなかった。また新潟では、大卒以上の割合が「常連」のほうが多いものの、全体の傾向として両者の間に大きな学歴差があるとはいえないだろう。

図表14 地域別「常連」「一見」別にみた学歴 (%)

	東京		新潟		鹿児島	
	常連	一見	常連	一見	常連	一見
中学校	0.7	0	0.9	0	1.3	0
高校	9.4	20.0	30.5	26.7	17.4	28.3
短大・専門	12.5	20.0	20.0	40.0	36.8	18.9
大学・大学院	76.9	60.0	48.3	33.3	44.5	52.8
その他	0.5	0	0.4	0	0	0
合計 (実数)	100 (1,014)	100 (115)	100 (545)	100 (15)	100 (155)	100 (53)

p<0.05                  p>0.05                  p>0.05

「常連」だけでなく「一見」も含めて、コンサート会場参集者の学歴は、全体に当該都県の学歴水準より高いこと、新潟や鹿児島では「一見」でも「常連」と同程度に高い学歴であるということは、クラシックコンサートに行くか行かないかという最初の選択のところで、すでに学歴の障壁があるということがいえるのではないだろうか。

## 3. 父親学歴

「常連」と「一見」の出身家庭の階層には違いがあるだろうか。図表15から父親学歴をみてみよう。東京では、「中等後／高等教育卒」の割合が「常連」では63%で「一見」では52.3%と、やや「常連」の父親学歴の方が高い。一方、鹿児島では、「中等後／高等教育卒」の割合が「常連」「一見」ともに49%で差がみられなかった。

父親学歴も本人学歴と同様に、「常連」だけでなく「一見」も含めて全体に当該都県の学歴水準より高く、また東京では「常連」の方が「一見」よりやや高く、鹿児島では両者がほぼ同じという傾向だった。

図表15 地域別「常連」「一見」別にみた父親学歴 (%)

	東京		新潟		鹿児島	
	常連	一見	常連	一見	常連	一見
中等教育卒	37.0	47.7	64.2	76.9	51.0	51.0
中等後／高等教育卒	63.0	52.3	35.8	23.1	49.0	49.0
合計 (実数)	100 (970)	100 (109)	100 (517)	100 (13)	100 (145)	100 (49)

p<0.05                  p>0.05                  p>0.05

## 4. 家庭環境

「常連」と「一見」の現在の家庭環境はどうなっているだろうか。本の冊数から文化的環境を、家庭で所有する財の量(「物質的豊かさ」<sup>7)</sup>から経済的環境をみてみよう。

まず、文化的環境を図表16からみてみよう。「常連」では、300冊の16.7%と400冊の36.1%をあわせて半数強が、家に本が300冊以上あるのに対して、「一見」で300冊以上家に本がある割合は3分の1程度にとどまる。逆に、家に本が50冊以下しかない割合は、「常連」では1割強にすぎないが、「一見」では3分の1に上る。一方、経済的環境については図表17のように、家庭で所有する財の量は、「常連」で7点が若干多く、「一見」で0点が若干多いものの、両者の間に統計的に有意な差はみられない。

なお、データは示していないが、地域による記述統計量の差はあまりみられなかった。

このように、家庭の文化的環境は「常連」の方が高いが、経済的環境にはめだつた差がみられなかった。この数値が社会一般でみたときに高いのか低いのかは、今回の調査ではわからないため、文化的環境や経済的環境の違いがコンサート参集者への参入の障壁となるかどうかはわからない。しかし、少なくとも、現在の家庭環境の経済的な差は「常連」と「一見」を分けるものではなく、文化的な差の方が両者を分ける要因としては強いということがいえる。コンサート会場まで足を運んだときに「一見」が「常連」に対して感じる違和感やクラシックコンサート「独特の雰囲気」は、「常連」のおかれた経済的環境よりも文化的環境が生み出しているものなのかもしれない。

図表 16 「常連」「一見」別にみた文化的環境  
(本の冊数) (%)

	常 連	一 見
ほとんどない	2.4	4.6
20 冊	3.6	16.3
50 冊	7.7	12.8
100 冊	15.7	16.8
200 冊	17.9	14.3
300 冊	16.7	11.7
400 冊	36.1	23.5
合 計 (実数)	100 (1,802)	100 (196)

※p&lt;0.05

図表 17 「常連」「一見」別にみた経済的環境  
(物質的豊かさ) (%)

	常 連	一 見
0 点	2.3	6.1
1 点	7.7	8.8
2 点	13.3	15.5
3 点	19.6	18.8
4 点	22.3	21.0
5 点	18.0	14.9
6 点	12.7	13.3
7 点	4.0	1.7
合 計 (実数)	100 (1,695)	100 (181)

※ p&gt;0.05

※「物質的豊かさ」指標は、「ピアノ」「ゴルフセット」「望遠鏡または顕微鏡」「パソコン」「美術品・骨董品」「ファックス」「ビデオカメラ」のうち、いくつ家にあるかをたずねて点数化した。

## 5. 出身家庭の音楽環境

「常連」と「一見」では、出身家庭の音楽環境は違っているのだろうか。図表18から、小学生の頃の家庭の楽器所有状況と両親の音楽行動をいくつか取りあげて検討してみよう。家庭の楽器所有状況は、東京では「常連」の69.9%に対して「一見」が78.3%とやや多く、鹿児島では反対に「常連」が61.3%で「一見」が54.4%だった。新潟の「常連」は東京や鹿児島の「常連」よりやや少なくて56.4%だった。両親の音楽行動については、「常連」と「一見」の間に統計的に有意な差がみられたのは「家で楽器を弾いたり歌ったりした」だけで、東京と鹿児島ともに「常連」の方が高かった。「常連」の両親の音楽

行動の様子を地域別にみると、東京と鹿児島はほぼ同じくらいの頻度で音楽行動をとっているが、新潟がやや低くなっている。このように、地域によって楽器の所有率や両親の音楽行動の割合に違いがみられるが、「常連」と「一見」の間に一貫した違いはみられなかった。

図表 18 地域別「常連」「一見」別にみた出身家庭の音楽環境 (%)

	東 京		新 潟		鹿 児 島	
	常連	一見	常連	一見	常連	一見
1. 小学生の頃に家に楽器があった	69.9	78.3*	56.4	73.3	61.3	54.4
2. 小学生の頃両親がレコードやCDを聴いた	16.4 + 22.5	19.3 + 25.2	6.8 + 14.5	20.0 + 13.3	10.3 + 24.8	7.3 + 21.8
3. 小学生の頃両親がコンサートや音楽会に行った	6.1 + 13.0	1.7 + 9.2	2.3 + 6.4	6.7 + 13.3	8.8 + 11.7	1.8 + 12.5
4. 小学生の頃両親が家で楽器を弾いたり歌ったりした	8.4 + 14.2	6.0 + 5.1*	6.4 + 11.6	0 + 13.3	14.8 + 16.2	3.6 + 9.1*

※\*は、p&lt;0.05

※2~4. は「よくしていた」+「まあしていた」

「常連」と「一見」は、階層的な差だけではなく、育ってきた音楽環境によっても分かれていくと予想していたので、この結果は予想外だった。しかし、この質問項目では、クラシック音楽以外のジャンルの音楽行動を分けていなかったのと、調査の設計と分析にあたって世代間格差を十分に考慮していなかったため、出身家庭の音楽環境とクラシックコンサートへ行くようになることとの直接の関連性を捉えることができなかったのかもしれない。この点は今後の調査研究にあたって修正すべき課題である。

## 6. 音楽学習歴

出身家庭の音楽環境では「常連」と「一見」の間に一貫した違いはみられなかったが、音楽学習歴はどうだろうか。図表19からみていこう。まず、学校教育における音楽学習の機会についてみると、高校芸術科で音楽を選択していた割合は、どの地域でも「常連」の方が「一見」に比べて20ポイント以上も高い。また、「一見」の実数の少ない新潟を例外とすれば、中学校や高校で音楽系の部活動に入っていた割合も「常連」の方が高い。その一方で、小・中・高時代に学校外で音楽を習った

経験(以下「学校外音楽学習」)は、地域を問わず、「常連」と「一見」の間に統計的に有意な差はみられなかった。

図表 19 地域別「常連」「一見」別にみた音楽学習歴 (%)

	東京		新潟		鹿児島	
	常連	一見	常連	一見	常連	一見
高校芸術科で音楽選択	61.5	37.9*	50.0	25.0*	51.3	31.0*
中学校で音楽系の部活	31.2	19.5*	27.6	42.9	34.2	30.4
高校で音楽系の部活	34.4	15.8*	25.6	40.0	30.1	16.7*
小・中・高時代に学校外で音楽を習った	59.1	57.5	38.9	35.7	39.8	27.9

※\*は、 $p < 0.05$

ここで最も注目すべきは、第一に、学校関係の音楽学習は、例えば「高校芸術科で音楽選択」が東京の「常連」で61.5%に対して新潟は50%で鹿児島が51.3%のように、地域間の差が10ポイント内外と小さいのに対して、「学校外音楽学習」は、「常連」「一見」とも地域間の差が20ポイントと大きいことである。第二に、「高校芸術科で音楽選択」と「学校外音楽学習」を比較してみると、東京では、「常連」は61.5%と59.1%でほぼ同じ割合なのに対して、「一見」は「高校芸術科で音楽選択」が37.9%と低いのに、「学校外音楽学習」の割合は57.5%と高くなって「常連」に近くなること、鹿児島では逆に、「一見」が31%と27.9%でほぼ同じ値なのに対して、「常連」は「高校芸術科で音楽選択」が51.3%と高いのに、「学校外音楽学習」の割合が39.8%と低くなって「一見」に近くなっていることである。

このデータからは、「常連」と「一見」を分ける要因として階層に起因する部分と市場に起因する部分のバランスが、地域によって異なっていると考えられるのではないだろうか。

7. クラシック音楽に対するかまえ

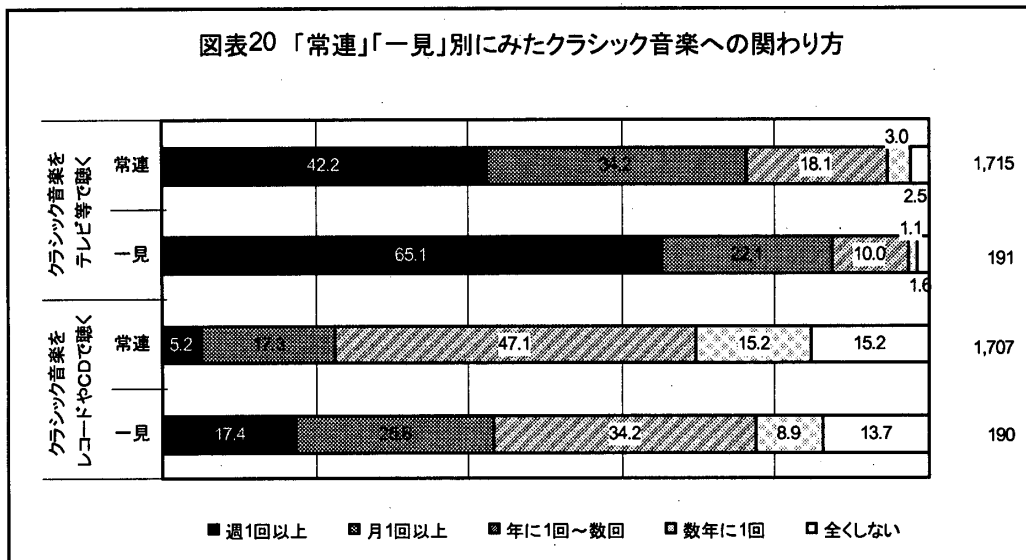
本章の最後に、「常連」と「一見」でクラシック音楽に対するかまえに違いがあるのかどうかを、行動面と意識面のそれぞれからみてみよう。

まず行動面について、「クラシック音楽をテレビ等で聴く」と「クラシック音楽をレコードやCDで聴く」頻度を図表20にまとめた。「テレビ等で聴く」頻度は、「常連」は「週1回以上」=42.2%、「月1回以上」=34.2%と、かなりのヘビーユーザーなのに対して、「一見」は「週1回以上」=5.2%、「月1回以上」=17.3%、「全くしない」=15.2%と、あまりテレビ等でクラシック音楽を聴くことはないようだ。また「レコードやCDで聴く」頻度は、「常連」で「週1回以上」=65.1%、「月1回以上」=22.1%と、大半の「常連」が毎週かそれに近い頻度でしょっちゅうレコードやCDでクラシック音楽を聴いている様子がうかがえる。それに対して、「一見」は「週1回以上」=17.4%、「月1回以上」=25.8%で、テレビ等に比べれば高い頻度で聴いているものの、「全くしない」も13.7%いて、「常連」と比べるとずいぶんと頻度は低い。

次に意識面は、クラシック音楽に対してどのようなイメージをもっているのかを捉えるために、「敷居が高い」「マナーにうるさい」「学校の勉強っぽい感じがする(以下「勉強っぽい」)」「よくわからない」の4つを尋ねた。その結果を図表21からみていこう。

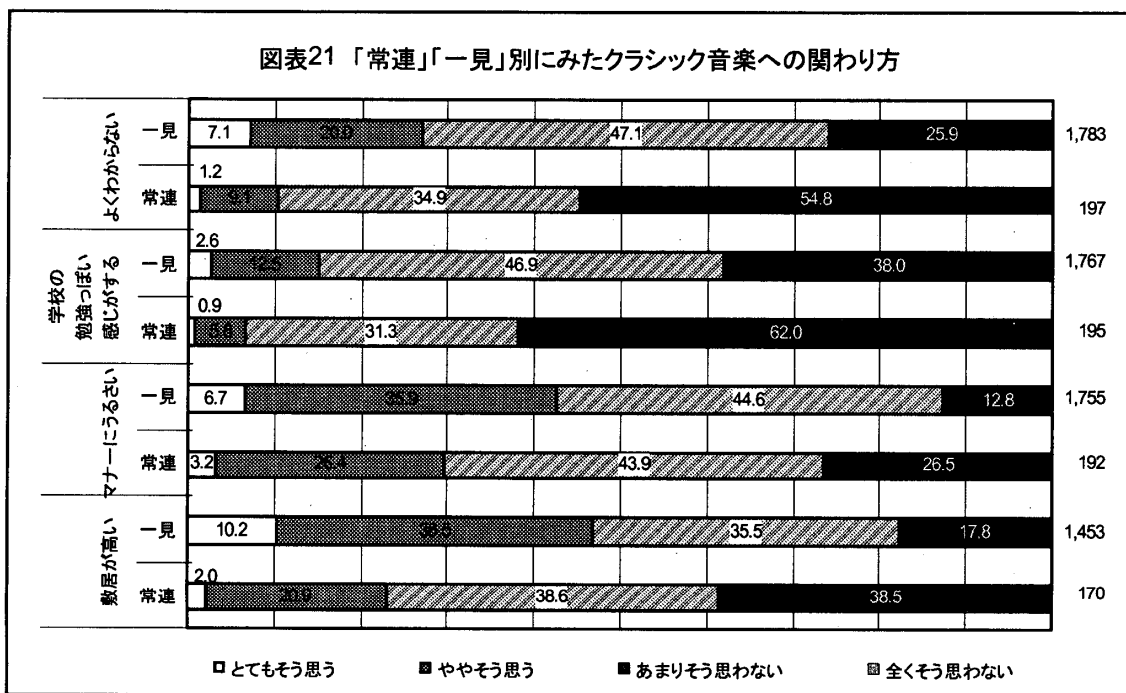
一般に、「敷居が高い」「マナーにうるさい」などのイ

図表 20 「常連」「一見」別にみたクラシック音楽への関わり方





図表21 「常連」「一見」別にみたクラシック音楽への関わり方



メージが、クラシック音楽が敬遠される原因のひとつになっているようだが、たしかに「常連」に比べて「一見」の方がそのようなイメージを強くもっている。つまり、「常連」で「敷居が高い」というイメージをもっている割合は22.9%なのに対して、「一見」では46.7%と倍以上いる。反対に、「全くそう思わない」割合は「常連」では38.5%と「一見」の17.8%の倍以上いる。また、「マナーにうるさい」というイメージをもっている割合は、「一見」が42.6%で「常連」の29.6%より10ポイント以上高い。

一方、「勉強ばい」や「よくわからない」というイメージは、全体としては「敷居が高い」「マナーにうるさい」に比べてあまりもたれていないようだ。しかし、そのようなイメージをもっている割合は、「勉強ばい」が「常連」で6.7%、「一見」で15.1%などと、どちらも「常連」より「一見」の方が2倍強いる。とくに注目すべきは、「全くそう思わない」の割合で、「勉強ばい」では「一見」が38%なのに対して「常連」は62%、「よくわからない」では「一見」が25.9%なのに対して「常連」は54.8%となっている点だ。「一見」の人たちの多くは漠然とそのようなイメージを抱いているのに対して「常連」の人たちの多くはそのようなイメージをもっていないようだ。

以上、7つの項目から「常連」と「一見」の相違点を整理してきた。これらの分析を通してしてみると、たしかに、両者の間には一定程度の差異があるように思われる。そして、コンサート会場参集者の大半が「常連」であることを考えれば、彼らの属性や特性によってク

ラシックコンサート「独特の雰囲気」が創り出されているといえるだろう。だが、個別の項目をみていくと、「一見」をまったく排除してしまうほど両者の間に客観的な違いがあるようにも思えない。

むしろクラシック音楽に対する負のイメージを引きずってコンサート会場に来てしまった「一見」は、おそらく、「常連」と「一見」の可視的な差異から醸し出される「独特の雰囲気」をこれらのイメージで増幅してしまっ

VI. まとめ

本稿では、21世紀前半に音楽文化のありようが大きく変わっていくと予想されるなかで、クラシック音楽、とくにクラシックコンサートが階層文化としてある階層に閉じられたものになっていく可能性があるのではないかという関心から、その可能性を探る議論の前提として、これまでは実感のみで実証的に十分に検討されることなかったクラシックコンサート会場参集者の特徴を社会学的な観点から明らかにすることを目的に、コンサート会場参集者に対して実施したアンケート調査の分析を行った。

以上、Ⅲ章からⅤ章までの分析を通して得られた知見を冒頭に立てた3点の分析課題にそって改めて整理しておこう。

第一に、コンサート会場参集者は、都市部に住む高年齢で高階層出身かつ高学歴者の「常連」中心に構成さ

れていることが明らかになった。描き出されたコンサート会場参集者像は、SSM調査に基づいてクラシックコンサート参集者の社会学的特徴を分析した米澤(2000)と比べると、年齢層や本人学歴などのいくつかの指標で、より特定の、つまり高い階層に偏っていた。また、美術館参集者の調査を行った山下(1998)と比べると、高学歴者が多く、とくに高年齢層の高学歴比率が高かった点は一致するが、美術館参集者が若年層に偏っていたのに対して、コンサート会場参集者は高年齢層に偏っており、年齢層で大きな違いがみられた。

また、コンサート会場参集者には、地域による社会学的特徴の違いがはっきりみられた。それは、社会学的特徴に関するそれぞれの地域性をふまえた違いでもあり、また、クラシック音楽事情の地域による違い、つまりコンサート会場の数やコンサートの開催数の違いによるものでもあったといえよう。加えて、東京の例からは、コンサートによっても参集者の社会学的特徴の違いがあることがうかがえた。つまり、会場、ジャンル、演目、出演者の四者の組み合わせによって、コンサート参集者の特徴が異なっている可能性があることが明らかになったのである。

第二に、コンサート会場参集者が初めてクラシックコンサートに行った時期は、「小学生以下」「中高生時代」「大人になってから」の3つの時期に大きく分かれるが、地域や世代によって大きな違いがあることが明らかになった。とくに、現在クラシックコンサートの「常連」となっている高年齢層が、実は大人になってから足を運ぶようになっていたことがわかった。さらに家庭環境によってもクラシックコンサートの初体験の時期に違いがみられ、学齢期にクラシックコンサートを体験する機会として学校行事が家庭環境の差を埋める働きをしている可能性があることが示唆された。

第三に、コンサート会場参集者を「常連」と「一見」に分けて、両者の相違点を検討したところ、全体的には、「常連」の方が高年齢層、高学歴で、文化的環境に恵まれているなど高い階層にあり、音楽学習経験も豊かで、クラシック音楽に対して親和的なかまををしているということが明らかになった。しかし、それが、ある階層以外の人をコンサート会場から排除する、または、「一見」を再びコンサート会場に来ることを躊躇させるほどに大きく偏り、彼らに閉鎖性や疎外感を感じさせるほどのようなものではないようだった。

ただし、分析したそれぞれの項目ごとにみられる「常連」と「一見」の違い方は、地域によって異なっており、それらを総合して捉えるならば、東京と新潟・鹿

児島では、クラシックコンサートに行くことが「正統文化」として人々に認知されるされ方が違うということが予想される。つまり、東京では、米澤(2000)が論じるように、市場に立脚している傾向が強いのに対して、新潟や鹿児島では、特定の人々—高学歴の高年齢層、しかも、音楽経験の有無の違いを伴わない人々に占有されていること自体によって認知されている傾向が強いと考えられるのである。

冒頭でも述べたように、クラシックコンサート会場参集者を直接の対象として彼らの特徴を明らかにしようとする実証研究は、これまでほとんど蓄積されてこなかった。そのため、筆者は本調査をパイロット・スタディと位置づけて、本稿では、数少ない先行研究との比較をしながら、彼らの社会学的な属性や音楽面での特性といった特徴を記述的に整理して、クラシックコンサート「独特の雰囲気」を描き出すことを試みた。その結果、さまざまな角度から個別的にコンサート会場参集者の特徴が“どうなっているか”を記述することはできたかもしれない。しかし、総体として「独特の雰囲気」を描き出すことと、そしてコンサート会場参集者のもつさまざまな特徴の要因、つまり“なぜそうなっているか”に答えることは十分にできなかった。

このように、粗い記述にとどまらざるをえなかった半面、この調査のデータからは分厚い記述ができなかった点や説明ができなかった点が明らかになったことで、今後、クラシックコンサート参集者の特徴とその要因を明らかにすることをはじめ、音楽文化の実態を明らかにしていくために、このような調査を実施するにあたって、また分析を進めるにあたって、修正したり加えたりすべき課題がみえてきた。そこで最後に、今後の課題をいくつか提示しておきたい。

#### i. 分析モデルの設定にあたって

- ①クラシックコンサートへの参入のきっかけを明らかにする。また誰が「常連」になっていき誰が「一見」に終わるのか、その要因をつきとめる。とくに高年齢層と若年層の違いに注目して明らかにする必要がある。
- ②都道府県間、および都道府県内にみられる、都市部と地方のロジックの違いをより詳しく明らかにする。例えば、「常連」と「一見」の線引きじたいが地域によって違うかもしれない。またコンサート会場参集者の属性や特性のもつ意味合いが地域によって違うかもしれない。
- ③地域の差に加えてコンテンツの差に注目して、よ

り詳細な調査分析を行う。東京の例で示唆されたように、コンサート会場、ジャンル、演目、出演者によって、またチケットの値段や流通ルートなどの市場との関係によってもコンサート会場参集者の属性や特性は大きく異なっていると考えられる。

④ジェンダーの問題を考慮する。経験的に、我が国では、他の音楽ジャンルや他の文化活動と比べてクラシック音楽ではジェンダー差が顕著にみられることから、階層差や地域差と並んで、ジェンダーはコンサート会場参集者の特徴を明らかにする際に考慮すべき指標と考えられる。

⑤コンサート会場参集者の社会的特徴に加えて、学校経験、音楽学習歴、音楽行動経験などからくる特性にも注目し、「常連」と「一見」を分けるような、クラシックコンサート「独特の雰囲気」を抽出できる指標を見つける。本稿で扱った指標以外に、筆者には実感として「独特の雰囲気」を創り出す指標があるように思えるので、その指標を見つけて、分析モデルに加えていきたい。

## ii. 調査方法や調査対象の設定にあたって

①一般群(またはクラシックコンサートにまったく行かない人)を調査対象に加えて、「常連」と「一見」との3者間の比較をできるようにする。

②これまでの調査でまったく分析からはずされている子どもを含めるとコンサート会場の構成が大きく変わると予想される。また初めてのクラシックコンサート体験では家族が重要な役割を果たしていたことから、家族の存在にも注目する必要がある。これらの点をふまえた分析ができるように、子どもを調査対象に含める。

③すでに述べたように、会場、ジャンル、演目、出演者といったコンテンツの違いで客層が大きく変わりうるので、その違いを分析できるような調査対象の設定をする。

④アンケート調査による統計的分析の限界を考慮する。第一に、回収率などの調査実施上の限界がある。第二に、アンケート調査の設計上、質問できることや回答してもらえることに制限が加わる。第三に、コンサート会場で感じる実感を統計的分析に乗せる際のテクニカルな問題の限界がある。もちろん、アンケート調査による分析でまだまだ明らかにできることはたくさんあるが、こういった限界点を考慮して、他の調査方法とあわせた調査研究方法を開発していく必要がある。

## iii. 分析にあたって

本稿では、コンサート会場参集者の属性や特性の分析にあたっては地域差を統制する程度で、個々の変数ごとの記述を中心にしてきた。しかし、それでは、彼らの特徴の全体像やクラシックコンサート「独特の雰囲気」を総体として捉えることはできない。そこで、今後分析を進めていくにあたって、今回は行わなかった諸変数間の関係を明らかにする。

## iv. 社会へ還元するにあたって

クラシック音楽やクラシックコンサートへの参入の段階で排除されることなく、それらがより多くの人々に開かれるようにするために、本調査の分析や考察結果を学術研究にとどめず、学校や生涯学習などにおける教育プログラムの開発やコンサート会場のハード・ソフト両面における工夫、コンサートの開催内容や方法の検討に活かせるように公開していく。

このように課題は山積しているが、この領域の研究は始まったばかりである。先行研究としていくつか挙げた研究が調査を行った1980年代や1990年代とは、すでに、音楽文化のなかでクラシックコンサートの置かれている位置も変わりつつある。その位置づけは、同じクラシック音楽でも複製芸術とのかねあい、ポピュラー音楽との関係、音楽以外の1回性の舞台芸術との関係なども含めて、時々刻々変わっていくものであるが、その変化を十分ふまえながら、これらの課題を解決し、クラシックコンサートやクラシック音楽をめぐるさまざまな実態とその要因を明らかにしていけるように、今後の調査研究が積み重ねられていくことを期待する。

## 註

1)本調査全体としては、より広くクラシック音楽に関わる人々の社会的特徴と音楽学習歴との関係を調査することを目的としており、「クラシックコンサート会場参集者」の他に、比較群として、3地域で「成人向け音楽教室の生徒」「公立学校の生徒・児童の保護者」に対しても調査を実施している。それらを含めた本調査全体の調査概要とサンプル構成は以下のとおりである。なお、本稿では比較群のデータは扱わない。

### i. 調査の概要

調査題目：「成人の音楽学習歴と音楽行動に関するアンケート」

調査対象：①クラシック音楽受容群 i (鑑賞行動) = クラシックコンサート会場参集者 (会場)

②クラシック音楽受容群 ii (表現行動) = 成人向け音楽教室の生徒 (教室)

③一般群 = 公立学校の生徒・児童の保護者 (一般)

調査時期: 2002年4月~8月

調査地域: 東京都23区内, 新潟市, 鹿児島市

サンプル構成: 図表22を参照

図表22 地域別対象群別サンプル構成 (人)

	鹿児島会場	鹿児島教室	鹿児島一般	新潟会場	新潟教室	新潟一般	東京会場	東京教室	東京一般	合計
男	82	23	73	257	57	65	541	4	35	1137
女	177	34	385	336	214	260	671	23	235	2335
合計	259	57	458	593	271	325	1212	27	270	3472

### ii. 調査設計上の留意点

先述の先行研究の長所と短所を整理して, 調査対象の設定と調査項目の内容に関して次のような点を考慮した調査を設計した。

- ・クラシックコンサート会場参加者と一般の成人を比較する
- ・地域性を考慮する
- ・社会階層の他に家庭の音楽環境を質問する
- ・学校内外の音楽学習歴を質問する

### iii. 調査実施方法と留意点

#### ①クラシックコンサート会場参加者

3地域のクラシックコンサート会場に依頼して実施した。

東京: 5会場9回, 新潟: 1会場1回+会場の「友の会」会員, 鹿児島: 1会場1回

性別が明記されており, 中学校卒業以上と判断できる回答を有効票とした。

#### ②成人向け音楽教室の生徒

3地域の音楽教室に依頼して成人向け教室で実施した。

性別が明記されており, 中学校卒業以上と判断できる回答を有効票とした。

#### ③公立学校の生徒・児童の保護者

3地域それぞれに小・中・高1校ずつに依頼して実施した。

一部の学校では, 学校からの要請を受けて学歴質問をはずした。

性別が明記されており, 中学校卒業以上と判断できる回答を有効票とした。

2) 新潟市の調査で, 会場の「友の会」会員に対して調査を行ったのは, 回収数が少なくなる危険性を考慮した会場側の配慮と希望による。なお, 調査を実施するコンサート会場の選定にあたっては, 東京大学大学院総合文化研究科の長木誠司助教授の助言とご紹介, 社団法人日本クラシック音楽事業協会の善積俊夫専務理事の助言とご紹介をいただいた。この場を借りてお二人と調査にご協力いただいた各コンサート会場関係者各位に深くお礼申し上げます。

3) 大ホールと小ホールの両方を持つ会場で実施したので, 会場数の和がずれている。

4) 実際, このアンケートに複数の会場で回答したという方がいたが, そのくらい「常連」はあちらこちらの会場で開催されるクラ

シックコンサートに足繁く通っているのだ。

5) 本稿の目的はコンサートによる違いを明らかにすることにはないので, 以下の各項では記述を省略するが, 年齢層以外の項目でもコンサートによって社会的属性の特徴に差がみられた。しかし, VI章のまとめで指摘するように, コンサート会場, ジャンル, 演目, 出演者などの違いに注目してコンサートごとの参加者の社会的属性などの違いを明らかにしていくことは, 今後の研究において必要だろう。

6) 藤田他(1987)との比較を考えれば, 父親の職業を指標にすべきだが, 藤田他(1987)は大学生を対象に調査を行っており, 調査実施時点での父親の現職を尋ねることが可能だが, 本調査では, 父親の職業は回顧的な情報になり, 昇進や転職等を考慮すると, どの時点での父親の職業を回答されようとも, 父親の職業から一義的に出身家庭の階層を読み取ることができない。そこで, 本調査では, 父親学歴を出身家庭の階層の指標として用いる。

7) 家庭の経済的環境を計るために用いる「物質的豊かさ」の指標は, 筆者を含む, 部活動を通して中高生の学校への関わり方や進路選択の様子などについて研究している研究グループが質問紙調査で用いているものである。その詳細については, 西島他(2001)の「V章 部活動とスポーツ・文化的活動の機会-出身家庭に係る条件に注目して-(荒川英央著)」を参照のこと。

### 参考文献

- Bourdieu, P.他 訳書1994 『美術愛好』木鐸社。
- 藤田英典他 1987 「文化の階層性と文化的再生産」『東京大学教育学部紀要』第27巻。
- 橋本健二 1988 「文化評価の構造と文化の階層性」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学編』24(2)。
- 加藤毅他 1995 「芸術文化活動の参加メカニズムと文化政策」『文化経済学会論文集』第1号。
- 西島央他 2001 「移行期における中学校部活動の実態と課題に関する教育社会学的考察 -全国7都県調査の分析をもとに-」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻。
- 杉江淑子 1995 「成人のアマチュア音楽活動と学校音楽科教育との関連に関する調査研究」(文部省科学研究費補助金研究成果報告書)。
- 社団法人日本クラシック音楽マネジメント協会 1998 『クラシック音楽コンサート市場活性化のための調査研究報告書』。
- 社団法人日本クラシック音楽マネジメント協会 1999 「『活路開拓調査・実現化事業』~クラシック音楽コンサートの鑑賞者市場の活性化に向けて~」。
- 山下雅之 1998 「美術館との対話 社会学」並木誠士他『現代美術館学』昭和堂。
- 米澤彰純 2000 「市場に立脚する正統文化 クラシック・コンサートに集う人々」今田高俊編『日本の階層システム 5 社会階層のポストモダン』東大出版。

※なお, 本研究は, 平成13年度花王芸術・科学財団の研究助成を受けて行ったものである。